

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 13 日現在

機関番号：13701

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2009～2013

課題番号：21520078

研究課題名(和文) フランクフルト学派の理論にみる倫理と公共圏に関する研究

研究課題名(英文) Studies about ethics and the public sphere in the theory of the Frankfurt School

研究代表者

三崎 和志 (MISAKI, Kazushi)

岐阜大学・地域科学部・准教授

研究者番号：40506961

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円、(間接経費) 1,080,000円

研究成果の概要(和文)：本研究はフランクフルトの倫理思想と公共圏に関する理論を課題とした。フランクフルト学派第1世代(ホルクハイマー、アドルノ、ベンヤミン)における倫理思想の核心を「いたみ(痛み/悼み)」という語によって総括、抽出し、この「いたみ」の思想の形成に関わる個別的な論点に関する研究を進めた。また、コミュニケーション論的展開 以後のフランクフルト学派の思想、ハーバーマスの討議倫理、ホネットの承認論に関して考察し、フランクフルト学派の新たな理論的展開においても、第1世代のいたみの思想が重要な寄与をなしていることを明らかにした。

研究成果の概要(英文)：The subject of this study is the ethical theory and the theory of the public sphere of the Frankfurt School. The core of the ethical thought by the first generation of the School(Max Horkheimer, Theodor Adorno, Walter Benjamin) can be summarized under the term "itami"(Japanese; pain/mourning, German; Leiden/Trauer). This study searches the formation process of this thought, and makes it clear that this thought can make significant contributions to the new developments of the theory of the School after "communication theoretical turn".

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学・思想史

キーワード：フランクフルト学派 アドルノ ベンヤミン ホルクハイマー

### 1. 研究開始当初の背景

フランクフルト学派の批判理論はハーバーマスによって、いわゆるコミュニケーション論的展開を遂げた。彼は前世代のホルクハイマー/アドルノの『啓蒙の弁証法』における道具的理性批判を受け、それを前提としたうえで、理性の道具的でないあり方を、自然と人間のあいだの主客構造から、人間観の合意という相互主観性に定位し、そこにはたらく合理性をもとに非道具的、非抑圧的理性のあり方を示した。ハーバーマスの方向性は次世代のホネットの承認論を軸とした議論にも継承され、批判理論は相互主観性を舞台として展開がつつげられているのが現状である。

### 2. 研究の目的

本研究は、コミュニケーション論的展開を遂げた批判理論の現在の状況を見極めつつ、ハーバーマス以前の世代、ホルクハイマー、アドルノ、そしてベンヤミンの倫理と公共圏に関連する議論をふりかえり、相互主観性を主要なアリーナとする現在の批判理論との連続性を探るとともに、現在の批判理論にあらたな問題を提起するような論点を見出すことにあった。

### 3. 研究の方法

研究の方法としては、オーソドックスな文献研究を積み重ねた。またベルリンのベンヤミン・アルヒーフでベンヤミンの著作に関するデータベース検索と系統的な2次資料の調査、アドルノの未刊行資料の調査をおこない、フランクフルトのホルクハイマー・アルヒーフでもホルクハイマーの資料を調査した。

### 4. 研究成果

研究期間中、発表論文等として公表することのできた成果を、以下、おおきく2点に区分して記す。

(1)アドルノら第1世代に関する研究に関しては以下の成果が得られた。

雑誌論文では、アドルノの二つの伝記の検討をとおして、現代ドイツにおいてアドルノが占める位置に関し考察した。

図書では、ホルクハイマーとベンヤミン、アドルノに至る倫理に関わる思索の線を「いたみの思想」として整理した。

ヒラリー・パトナムは、いかなる超越的原理に依拠することもなく、所与の状況において人間が直面する具体的な問題に何らかの対策を講じる、可謬性をはらんだ知の営みこそ、《第三の啓蒙》の段階にある哲学の姿だと主張する。これは30年代のホルクハイマーの唯物論理解に符合する。何らかの究極的な第一者を出発点として体系を構築する形而上学的思考を排し、痛みを除去し幸福のために、不幸を条件づけている関係の変革を目

指すこと、これが物質を第一原理とする形而上学的な唯物論と異なる、ホルクハイマーにとっての唯物論であった。

しかし、この非形而上学的唯物論は問題をはらんでいる。ホルクハイマーの唯物論観からすれば、過去の不正、痛みは現実的にいつて修復不可能であるとしか言いようがない。だが、不正を被り苦しみ死んでいった者のことを忘却し、ただ現実生きる人間のよりよい未来のことしか考えないとすれば、そのような思想は決定的に正義を欠くことになる。その意味で、取り返しのきかない過去、不正を被って死んでいった者へのまなざし、《悼み》の要素が、非形而上学的な唯物論の倫理の源泉として不可欠なものとなる。

アドルノは『否定弁証法』において《痛みを覚える身体との連帯》を彼の倫理の拠りどころとする。そして、アウシュヴィッツのような事態が現実化してしまったこの世界を、その死者を忘却することなく、なおも存続し、生きるに値するものとするものとして、現実の些細な《美的なもの》に注目する。それは、道具的理性の手段-目的連関から離れた《無》に等しい《何か》であり、アドルノはベケットの作品にそのような《無》の表現をみる。これこそ、アウシュヴィッツの悲惨を経験した世界の存在を肯定する梃子となる《他なるもの》であり、そのような美的なものに立脚して《アウシュヴィッツ以後》の世界が存在する意味を射当てることが、彼のいう「崩壊の瞬間にある形而上学との連帯」であった。

学会発表では、現在の哲学的議論のキーワードである他なるものについて、アドルノにみるいたみと、美的なものへの着目の文脈において考察し、アドルノにとっての他なるものが持つ意味を考察した。

図書では、『啓蒙の弁証法』における道具的理性批判の骨格を示し、それが『否定弁証法』における戦後のアドルノの思想との関連を示した。

学会発表および雑誌論文では、ベンヤミンの絶筆、通称『歴史哲学テーゼ』における歴史観の特徴を概観したうえで、ベンヤミンの主張する、勝者の側に立つものではない歴史の具体相をベンヤミンの物語論と関連付けることで示した。『歴史哲学テーゼ』では、歴史を連続的進歩と捉える歴史観が、歴史の勝者の側に立つものであり、進歩の裏面にある野蛮を忘却したものとして批判され、歴史の連続性の打破が史的唯物論に課された課題だとされる。では、敗者の側に立つ歴史とはいかなるものか。そのイメージの一端がエッセイ『物語作者』に示されている。ひとが他者から聞いた話をいったん自分の中に沈めたうえで、独自の変容を加えながら語り継ぐ営み、そこにベンヤミンは敗者が紡いでいく伝統を見ていた。

また、上記の内容に加え、ベンヤミンが学生時代に師事したヘルマン・コーヘンの倫理

的社會主義との立場との比較でベンヤミンの歴史観を考察し、ベンヤミンの歴史観が持つ思想史的位置を示した。ベンヤミンの批判する社会民主党の歴史観につながるようになった倫理的社會主義の立場に立ったコーヘンは、資本主義がその法則によりおのずと没落するという、カウツキーの自然主義的な史的唯物論理解を批判している。ベンヤミンは歴史哲学テーゼにおいて社会民主党の歴史観を勝者の歴史観として批判しているが、内容的には、コーヘンのカウツキー批判の立場を共有している。ベンヤミンは、自動的な進歩を批判し、コーヘンが要請した理想の位置に、過去の追想、歴史の中で滅びて行った敗者の希望の請戻しを置いた。ベンヤミンの歴史観は、コーヘンによるカウツキー派の批判を共有しつつ、コーヘンの理想主義的な限界を超えようとしたものと位置づけることができる。

(2) コミュニケーション論的転回 以後の批判理論、およびそれと第1世代との関係に関する研究で得られて成果については、以下のようなかたちで発表した。

学会発表 では、倫理学における理性的原理、前理性的（感情的、衝動的）原理、それぞれの意義を、フランクフルト学派の倫理思想の文脈において考察した。

ハーバースは、ホルクハイマー/アドルノの道具的理性批判が、道具的理性の欠陥を告発するだけで、何が欠陥かを説明できていないという認識に立ち、批判理論のコミュニケーション論的なパラダイム転換をはたした。しかしハーバースはコミュニケーション的合理性を構想するにあたって、第一世代の理性批判を忘れたわけではない。彼は、ディスクルス倫理学で中心的役割を果たす普遍化原則を、アドルノの理性批判が該当しないように構成した。ディスクルス倫理学においてコミュニケーション論的に再構成された普遍化原則は、実際にコミュニケーション行為をおこなう者に対して超越的性格を持たないし、個々の行為者の利害関心にとって抑圧的性格も持たない。

このコミュニケーション論的に構想された正義は、ハーバースによれば、その他者として、連帯を必要とする。連帯とは、相互主観的に共有された生活形式の中で親交を結ぶ仲間の福祉とその生活形式そのものの維持に関わる感情的契機である。しかし、家族や民族といった連帯の制約は、ディスクルスの中で普遍化されたコミュニケーション共同体により、はじめて打破される。ハーバースにおいて感情的契機は正義の境界を越えることはない。したがって、たとえばケアの倫理学はディスクルス倫理学の中に正当な場を持ちえない。アドルノは連帯の源泉を、あらゆる有限な被造物が避けることのできない痛みに見る。この《痛みを覚える身体との連帯》にもとづけば、ケアの倫理

学の立場を正当化することができる。またディスクルス倫理学も、その正義を維持するためには、この感情的、衝動的要素を考慮に入れなくてはならない。

雑誌論文 では、アルブレヒト・ヴェルマーのコミュニケーション論的な真理論を整理し、それが、アドルノの倫理想とのかかわりがあることを示した。ヴェルマーは、たんなる個別的な命題について、その真理を問うことの意味をラジカルに否定するローティのポストモダン的な真理観に対し、個々の言明について、真理概念が有効性を持つことを示したうえで、個々の言明をこえた真理概念を擁護する。あらゆる真理を包含するのは「善き生」という理念である。これはそれ自体としては記述しきることのできないような理念であり、現実の個々の善さ、そして悪しきものとの対比で否定的にのみ示しうるようなものである。この理念なしには個々の言明の真理も意味を持たなくなる。このヴェルマーの所説にはアドルノの否定弁証法の影響がみられる。

図書 では、アクセル・ホネット承認論との関係を念頭に、初期マルクスの疎外論のうち、有名な労働の疎外ではなく、社会的交通の疎外の議論を検討し、その意義を、アメリカにおける生命保険の歴史と代理出産という二つのトピックに即して考察した。

初期マルクスの疎外概念は、近代の合理化過程を全否定し、前近代的な単純で牧歌的生活のノスタルジックな肯定と捉えられることがある。しかし、疎外概念を有名な『経済学・哲学草稿』における労働の疎外ではなく、ミルに関するノートにおける社会的交通の疎外論から捉えた時、新たな視点がひらける。そこでは人間関係が貨幣の媒介によって、倒錯したものとなりうるということが語られ、それに対し、愛が愛とのみ、信頼が信頼とのみ交換されるような人間的な関係が対置されている。貨幣による媒介によって人間的な関係が毀損されること、それが社会的交通の疎外の把握するところであり、それは市場による倫理の毀損とも言いうる。

エリザベス・アンダーソンの代理出産批判には、マルクスの社会的交通の疎外と同様の論理構造が見いだされる。アンダーソンにとって、金銭契約による代理出産契約は、出産した子を他者に譲渡しなくてはならないという契約を優先し、母が子に対して抱くであろう自然な愛情を禁止するものである、という点に最大の問題がある。母が子に愛情を注ぐという、現代社会においても基本的に期待、要請される倫理が、代理出産契約においては否定され、愛情から子の譲渡を拒むことが契約違反という悪される構造になっている。

ゼライザーの描くアメリカにおける生命保険普及の歴史も、倫理と市場の抗争を示している。18世紀アメリカにおいて働き手である夫・父を失った未亡人と孤児は、近隣の住民関係と血縁親族関係、また非営利の相互扶

助団体によって支援されていた。それが 19 世紀に商業的生命保険にとってかわられるようになる。これは信頼と社会的連帯による相互扶助が市場的関係にとってかわったということを意味する。生命保険の普及は、かつて存在した社会的連帯を破壊することによって可能となった。

市場の力に抗して人間的なものの幅をどう確保するかは現代の重要な課題であり、疎外という概念はその文脈において依然として意義を持ち続けている

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 3 件)

- 三崎和志、時間の核ともの語り  
ベンヤミンの歴史/記憶論、哲学と現代、  
査読無、第 29 号、2014、24-45  
三崎和志、《真理空間》と《天使のまなざし》、  
季論 21、査読無、第 8 号、2010、  
186-196  
三崎和志、《アドルノ》の今-二つの伝記  
を中心に、唯物論研究年誌、査読無、第  
14 号、2009、269-276

[学会発表](計 3 件)

- 三崎和志、時間の核ともの語り  
ベンヤミンの歴史論、名古屋哲学研究会、  
2013 年 4 月 28 日、名古屋市立大学  
三崎和志、《言語論的転回》以後のフラン  
クフルト学派の倫理思想を再考する、唯  
物論研究協会、2011 年 10 月 16 日、札  
幌大学  
三崎和志、アドルノにおける<他なるもの  
>、東京唯物論研究会名古屋哲学研究会  
合同合宿研究会、2010 年 8 月 24 日、法  
政箱根荘

[図書](計 3 件)

- 三崎和志他、晃洋書房、西洋哲学の軌跡  
デカルトからネグリまで、2012、156-165  
三崎和志他、社会評論社、マルクスの構  
想力、2010、226-246  
三崎和志他、青木書店、哲学から未来を  
拓く(1)21世紀の透視図-今日の変容の根  
源から、2009、242-270

[産業財産権]

出願状況(計 0 件)

## 6. 研究組織

(1)研究代表者

三崎 和志 (MISAKI, Kazushi)  
岐阜大学・地域科学部・准教授  
研究者番号：4 0 5 0 6 9 6 1